

政治と文化の間 ——小説における梁啓超の近代意識をめぐって——

王閏梅

I はじめに

現代のジャーナリズム論によれば、ジャーナリズムの発展に伴い文化の政治化が起きているという¹⁾。しかし、中国伝統文化はまさにこれとは逆に、早くから政治と深くかかわってきた。中国の伝統社会において、読書人がなすべき積極的営為は経世済民にかかわることであり、読書人の学術研究や文学創作の多くがこの思想を基盤としていた。「文以載道」と言われるように、政治の道は「文」を通じて行われるのを常としてきた。つまり、中国の政治制度は早くから文化を代表する「文」を組み込んできたのである。しかしまた、近代中国に登場したジャーナリズムが伝統的な「文」の捉え方に大きな変容を齎した。この事実は梁啓超のジャーナリズム活動においても明らかに認めることができる。

梁は強学会時代の『中外紀聞』²⁾や後の『時務報』³⁾での成功によって一躍スタージャーナリストとなった。時事的なメディアの政治宣伝力を実感した彼は、雑誌・翻訳以外に、伝統社会で軽視されていた小説を活用しようとした。特に亡命後、彼は日本の政治小説から多大なヒントを得て、それらの翻訳から実際の創作、専門誌の創刊によって、小説界革命を起こし、小説の改良を大きく鼓吹した。

梁の小説論としては「訳印政治小説序」(1898)、「論小説與群治之關係」(1902)、「告小説家」(1915)の三篇に、『変法通義』(1897)、「飲冰室自由書・伝播文明三利器」(1899)中の一節と「小説叢話」⁴⁾中の数則がある。自作小説は『新中国未来記』(1902-1903)の未完の一篇である。梁が小説と関わったのは、彼において近代政治知識・思想が成長した時期に集中していた⁵⁾。梁の小説に対するスタンスの変化は、その政治思想・政治運動と大きな

1) ジャーナリズムとメディア論については、大石裕(2005)『ジャーナリズムとメディア言説』(勁草書房)を参照。

2) 1895年8月に創刊。最初は『万国公報』と名付け、45期以降に『中外紀聞』に改名された。

3) 1896年8月上海に創刊され、1898年8月第69期を出して停刊された。

4) 『新小説』第7号(1903)から連載し始める小説論のコラムである。

5) 1915年の「告小説家」において、梁啓超は社会風紀の悪化は小説家に責任があると指摘し、小説家にもっと責任感を持つようと呼びかけている。この内容から、この「告小説家」は前期の小説論

関わりを持っており、したがってそれは日本で西欧知識を吸収した後、彼の思想世界全体に生じた変化に伴うものであった。

梁の小説における試みが中国近代文学の発生に凶らずも大きな役割を果たしたことはすでに解明された事実となっている⁶⁾。本論は、彼の政治思想と文学意識ひいては文化思想がいかに小説、さらに言えば政治小説という媒体を通して、有機的繋がりを持っていたかを、その小説における近代意識の考察によって明らかにしたい。

II 小説というメディアの発見

梁啓超は『変法通議』の「論学校 幼学」(『時務報』第18号, 1897)の中で初めて小説に言及した。彼は小説に用いる言葉の分かりやすさに注目し、難しい書き言葉ではなく「俚語」(俗語)で書かれた小説は読者が多いことから、童蒙を開くものとして提唱する。しかし、それまで読書人に相手にされてこなかった小説を称揚するためには、まず彼らを説得しなければならない。ここで梁は従来の慣用法、つまり歴史から根拠を引く論法で説き始める。「小説一家は、漢志において九流の中に並べられている。古の士大夫はあるいは小説を軽視していなかった」が、後人は小説をよく利用せず、「誨盗誨淫」のようなものばかりを作り、社会風紀を乱したので、小説は軽視される存在となった。つまり小説の内容に問題があったのである。そこで彼は次のように提案する。

今専ら俚語を用いて、種々の書を広く著せば、上は聖教を明らかにすることができ、下は史事をあれこれ記すことができ、近きは国恥の意識を呼び起こすことができ、遠きは外国の事情にも通じることができる。ひいては、官途の醜態や科擧の腐敗、アヘンの悪癖や纏足の残虐も、みなつぶさに描き尽くし、民衆を励ますことができるのであり、教化に益すること量りしれない。

小説に盛り込む内容は、「聖教」、「史事」といった伝統的なもののほかに、「外国の事情」

とは異なる系統のものであると筆者は考えている。

6) 特に、斉藤希史「近代文学観形成期における梁啓超」(狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』, みすず書房, 1999), 夏曉虹『覚世与伝世—梁啓超の文学道路』(中華書局, 2006); 『閲読梁啓超』(生活・読書・新知三聯書店, 2006)が挙げられよう。これら積極的評価は近年の傾向であり、従来は、梁啓超は効用主義であるという論が多かった(たとえば、山田敬三「中国近代文学論序説—その比較文学的考察—」(『文学論輯』21, 1974), 「中国政治小説の成立—その理論の比較文学的考察—」(『文学論輯』22, 1975)「科学救国の夢(上)—魯迅とその時代(三)」(『福岡大学人文論叢』33(1), 2001)などが挙げられる)。ここでは、これらの論を踏まえながら考察を進めていく。

のような新時代を感じさせるようなものが挙げられている。「外国の事情」から世界における「清」の位置を民衆に教え、さらに「国恥」を意識させることで、「天下を知り、国家を知らない」（「中国積弱遡源論」、『文集』5, p. 15）当時の人々に近代的な意味での「国」の意識を植え付けようとするように見える。これは単に知識を教えるという意味で童蒙を開くのではなく、「民衆」に国や政治に関心を持たせるのに小説を活用しようとしたのではないかと思われる。

梁がここで小説に言及し始めたのは、師の康有為の影響による部分が多い⁷⁾。他に、嚴復と夏曾祐が『國聞報』に発表した『本館附印説部縁起』も彼に小説を活用するヒントを与えたようである⁸⁾。

このように、変法期の梁は師友の影響で小説の言葉の分かりやすさに着目し、小説という形式を利用して変法思想を広めようとした。しかし、この時期の彼は、『時務報』にこの種の小説を掲載したわけではなく⁹⁾、創作も試みず、結局皮相な理論家にとどまっていた。そして、戊戌変法の失敗後日本に渡り、日本の小説、とりわけ政治小説にヒントを得てから、真剣に小説に取り組み始めたのである。

梁の小説への関心の出発点は、経世済民を志す士大夫的であり、効用主義的である（前注3を参照）と言われているが、中国の危機克服を生涯の課題とした梁にとって、そもそも文学のための文学を提唱する余裕はなかった。いかなるジャンルであれ、その当時の問題解決に有用であると見なせば、躊躇せず採用するのが彼のやり方だった。

Ⅲ 日本の政治小説の手本

日本の政治小説に出会う前、梁は『西学書目表』に西洋小説『かえりみれば：2000年より1887年』¹⁰⁾の名を挙げている。ところが、この本の内容は将来についてのユートピア的描写、康有為の言葉を借りれば「大同の姿」であり、現実的政治思想や危機的社会的状況

7) 康有為の『日本書目誌』「教育の部」(p. 939)と「小説の部」(p. 1212)を参照してください。『日本書目誌』(1898)は康有為が弟子と娘の協力で明治20年頃の日本書7100冊を生理、理学、宗教など計15種類に分けて紹介したもので、所々に本の摘要や康のコメントが付けられている。

8) 説部(小説)は言葉が分かりやすく、読者層が広いことと、人を引き付ける力を持っていることが述べられている。『変法通義』の段階では梁啓超は小説の言葉の分かりやすさの一点のみに注目しているように見える。

9) 『新小説』を創刊する直前、『新民叢報』(1902年、第14号)に「中国唯一之文学報『新小説』』という広告を掲載している。そこで、『新小説』に掲載予定の小説のジャンルについて紹介し、「八、探偵小説……『時務報』の時に少し翻訳を載せた」という記述があるが、政治教育目的のものではないので、ここでは除外した。

10) Edward Bellamy “Looking Backward, 2000-1887”, イギリス宣教師 Timothy Richard 訳, 初刊『万国公報』第35-39号(1891年12月-1892年4月)。中国語訳名『百年一覚』。

を広く民衆に伝えようとしていた梁の役に立ったようには思われぬ。また、師の康有為の『日本書目志』には、当時の日本で有名だった政治小説家の作品がほとんど網羅されているが、梁がそれらを読んだ形跡はない。政治小説という概念にインパクトを受けたのはやはり日本亡命後だったろう。

日本へ亡命する船中で柴四郎の『佳人之奇遇』を読んだことを契機に(『梁啓超年譜長編』第1巻、丁文江、趙豊田編、島田虔次編訳、2004、p. 269)、梁は初めて政治小説という形式を自覚したように見える。

『佳人之奇遇』において、主人公東海散士が深く関心をもつ国々は、弱小国、あるいは植民地化された国々である。幽蘭の語るスペインは、皇位継承の争いから内紛が起り、国力は疲弊し森林は荒廃した。紅蓮の語るアイルランドも、英国から厳しい圧迫を受け、独立国とは名ばかりで、貿易干渉によって国力が疲弊している状況にある。これらの国々が主権を回復し或いは独立を画策するところが、梁の共感を呼んだと見られる。またこの小説には、ガリバルディのイタリア統一、サント・ドミンゴにおけるナポレオンへの抵抗、ハンガリーの独立運動、エジプトの英仏両国からの独立運動など、強国の圧力に苦しめられている国の惨状や圧力を撥ね退けて独立しようとする意志が繰り返し描かれている。これらは変法に失敗して日本に難を逃れた梁の心の中で、列強に取り巻かれた中国の立場、運命と重なって見えたと同時に、登場人物たちの情熱によって大いに鼓舞されたに違いない。

梁はまたこの小説から西洋政治や近代経済についての知識を学んだと見られる。小説の冒頭で紅蓮は、アイルランドがイギリスに併呑された経緯を語りながら、イギリスの自由貿易主義を次のように批判している。

若シータビ彼四海兄弟自由交通ノ甘言ニ欺カレ彼ト自由ニ貿易シ彼干渉ヲ招クトキハ、其邦国(土耳其、印度、埃及、諸邦)ハ漸次ニ生齒減ジ国力疲レ、国ニ独立ノ名稱アルモ独立ノ実力ヲ缺キ、年々歳々貿易鈞ヲ失ヒ、金宝ヲ輸出スル名ハ入貢ニ非ズト雖モ実ハ国民ノ膏血ヲ絞テ以テ英国ニ貢スルニ異ナラザルナリ。然ルニ世ニ空理ニ迷ヒ英人ノ術中ニ陥テ之ヲ曉ラザル者少カラズ、真ニ浩歎ニ堪ヘザルナリ。(『明治政治小説集』2、柳田泉編、1967、p. 12)

つまり作者は、トルコ、印度、エジプトの諸国がイギリスに圧迫されるようになったのは、世界主義的な自由貿易論の空理に惑わされた結果であると紅蓮に言わせている。作者の柴四郎は、アメリカ留学中はハーヴァード大学で政治、経済などを学び、さらにペンシルヴァニア大学では主に経済学を修めて、1884年に財政学士の学位を得て帰国した経済学者であった。彼の経済思想はイギリス型の自由貿易を批判し、独自の保護主義的国民主義経済学を完成した人物として知られたアメリカ人経済学者ケアリー (Carey, Henry Charles)

の学説から影響を受けている（「梁啓超の経済思想」，森時彦，1999，狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』，p. 233）。彼は留学中から犬養毅主宰の『東海経済雑誌』に度々寄稿していたが，その内容はいずれも自由政策の失敗，保護政策の成功，日本貿易の今後の方針，条約改正等に触れたものだった（『政治小説研究』上，柳田泉，1935，pp. 460-461，pp. 466-467）。柴四郎は『佳人之奇遇』の執筆により，当時の日本で一世を風靡していたイギリス崇拜，自由主義経済信奉の風潮に警鐘を鳴らす意図をもっていたと言われている。梁がこのような小説を耽読したとすれば，その政治思想・経済思想の影響は少なくなかっただろう。

梁は船中で早速翻訳を試み，それを亡命後間もなく創刊した『清議報』に1年近くにわたり連載した¹¹⁾。連載に当たり，彼は「訳印政治小説序」¹²⁾という序文を付け加え，まず康有為の小説論をほぼそのまま引用して，次のように発展させている。

昔欧州各国の変革が始まるや，立派な学者，優れた人物が，往往にして自身の経歴や胸中に蓄えた政治の議論を，専ら小説にあらわした。すると学校に学ぶ子弟が，授業の合間に，それを手にし口にし，下は兵士，商人，農民，職人，車夫馬卒，婦女童蒙に至るまで，手にして口にしないものはなく，往々にして一書出るたびに，全国の議論はそのために一変した。かの米・英・独・仏・奥・伊・日本の政界が日に進歩しているのは，政治小説の功績が最も大きい。英国の名士某君は言う，小説は国民の魂である，と。その通り，その通り。いま外国の有名な学者の著述にかかり，現今の中国の時局に関わりのあるものを専ら採り，順に訳し，雑誌の最後に附す。愛国の士よ，願わくは読まれんことを。

ここで梁が注目する小説の内容にさらに近代小説的なものが現れる。彼は変革の時代の偉人の経歴や，政治に対する考え方が小説に表わされることに大きな意味を見ている。また，西洋では立派な学者，優れた人物が小説の書き手であることから，西洋の小説に対する考え方が自国のそれとは違っていることに気づき始めている。続いて「変革が始まる」際の教育や世論操作が政治小説の役割として挙げられ，特に欧米や日本の例からそれが「政界の進歩に功あり」と説いている。

しかし，梁はそれら西洋小説が主に「学校に学ぶ子弟」，「兵士，商人，農民，職人，車夫馬卒，婦女童蒙」に向けられていたのを知りながら，自身が想定する読者層を婦女児童・民衆から「愛国の士」へと変えている。梁は中国の現実を踏まえて，政治小説を自分の宣

11) 『佳人奇遇』と題して、『清議報』1-3，5-22，24-29，31-35号に掲載された。原作の巻12の冒頭部を第35号（1900）に訳載したところで説明なしに中断し，第36号から『経国美談』の連載が始まる。

12) 1898年12月23日，『清議報』創刊号に，『佳人之奇遇』の翻訳とともに掲載されたものである。

伝手段として用いようと決心すると同時に、小説の宣伝対象を読書人に置き換えたのである。これは中国の民衆が西洋の民衆と比べられないほど識字率が低く政治的素養に欠けるという梁の認識を反映しており、だからこそ読書人を変革の担い手として想定せざるをえなかったのだろう。そしてこのように読者を読書人に設定し直したことが、後に小説の文体、言語表現に対する彼の意識に少なからぬ影響を及ぼしたと思われる。

『佳人之奇遇』を記載中、梁は日本の政治小説を渉猟し、その全体的状況を一定把握していたと見られる。例えば、彼は読書メモ『自由書』の一則「伝播文明三利器」（『専集』2, 1900, pp. 41-42）において、日本の翻訳小説から政治小説への流れやその代表作を書きとめている。とりわけ政治小説について「これらの作者はみな大政論家であり、自分の政治に対する意見を書中の人物に託しているのです、これらを単に小説と見なしてはいけません」と記し、そこに現れた創作特徴、作者や内容における中国伝統小説との違いを的確に指摘している。そして、政治小説の中で「最も国民に影響を与えたのは『経国美談』と『佳人之奇遇』の二編である」と結論づけるのである。

梁は『佳人之奇遇』に続いて、矢野竜溪の『経国美談』を記載した¹³⁾。『経国美談』の舞台となったのは紀元前4世紀のギリシャで、テーベの有志が寡人専制政治を廃して民権を確立し、やがてギリシャの小さな国々と同盟を結び、スパルタの圧力を撥ね退けてギリシャ全土の覇権を握るという物語である。この小説で竜溪は立憲改進黨的政治綱領を標榜するに留まらず、日本国内における民権の確立と国権の伸張をも示唆している。こうして、天下国家を第一義のものとし、民権を確立し国権を伸ばす、これを実現するのが政治であるという竜溪のメッセージは、当時の青年たちを鼓舞し大きな反響を引き起こした。中国の人々の心に政治的情熱を呼び醒まそうとさまざまに努力を重ねていた梁にとって、この小説は絶好のモデルとなった。原作者の矢野はかつて駐北京公使を勤めた人で、在任中に梁との接触もあった。梁がこの小説を選んで記載したのは作者である矢野のことも念頭にあったからだろう。

梁は日本において政治小説の恰好の手本を見せられ、そこから多く教えられたばかりでなく、その政治的メディアとしての可能性にも魅了された。もちろん、彼は日本における政治小説が果たした役割は自分が政治小説に求めようとしたものとは違うことを自覚していた。その代表作を翻訳・連載するのと並行して、梁は日本の政治小説や西洋小説を模範に小説論をも展開した。これらの努力は、郭沫若が自伝に「梁任公が訳した『経国美談』は彼の軽妙な筆法を駆使して……建国の英雄を描写したもので、本当に人を心酔させるものがあつた」（『少年時代』、郭沫若、1951、p. 125）と述べているように、当時中国の青年たちに大きな反響を引き起こしたのである。また効用主義的であるとはいえ、「政治小説」

13) 訳者が誰であったかについて諸説があるが、梁啓超か彼に近い人間がそれに携わったことは間違いないと思われる。

は小説の頭に「政治」を冠することにより、中国伝統小説の持つネガティブなイメージを排除することに大きく寄与したと思われる。小説を正統な文学として認めることのなかった中国の伝統的政治文化にとって、ここに小説が文学として発展する道が切り拓かれたと言えるだろう。

IV 小説界革命

亡命してからの梁啓超は西洋知識・思想を精力的に吸収していった。たとえば、彼は1901年から1903年までの間にホッブス、スピノザ、ルソー、モンテスキュー、ベーコン、デカルト、カント、ベンサムという西洋近代思想の中心的存在を論ずる思想家論を発表した。そして1902年前後から、時代認識に基いて救国の実践的方策を練るために、新しく吸収した西洋思想を、自己の思想的土壌に接合させ始める。同時に梁は中国の伝統学問に対し、全面的な清算を試みようとする。『清議報』の廃刊と共に1902年に創刊した『新民叢報』の規約に、「中国与西洋の道德を併せ取って徳育の方針とする」と述べているように、言論は『清議報』から一新した。第1号から『新民説』という代表的論説を連載し始め、民を一新することで中国の将来を導こうとする。また第2号には「保教非所以尊孔論」を発表し、思想の自由を唱えている。

小説界革命を提起したのはこの流れの一つと考えられる。そしてその実践活動として、梁は『新小説』¹⁴⁾を創刊し、自作小説『新中国未来記』を発表した。中国近代文学史上における『新小説』の意義は発刊前に『新民叢報』第14号に出された「中国唯一之文学報<新小説>」という広告からも窺える。まずその冒頭を見てみよう。

小説の道は人を深く感動させることができる。泰西では文学を論ずる者は必ず小説を一番とする。それはこの種の文体は曲折かつ透徹しており、描写が微に入り細をうがっていて、人群の情状を描き、天地の奥を披露し、普通の文章家には及ばないところをもっているからである。中国では先秦以前から、この道がすでに始まり、『漢書・芸文志』には小説家を九流に並べている。（『二十世紀中国小説理論資料』第1巻、陳平原、夏曉虹編、1997、p.59）

「小説」を「文学」の代表と見なしていることから、梁の小説に対する認識がさらに深化していることが分かる。判断の基準が西洋に置くようになったことは注目に値するが、論述は中国史に根拠を求めるといった慣用手法をまだ踏襲されている。ここには梁が西洋に

14)1902年11月日本の横浜で創刊され、第2巻からは上海の広智書局に発行が移され、1906年1月に停刊となった。

も確たる文化（文学）が存在することを認識し、自国の文化（文学）に対して抱いた危機感が同時に現われているように思われる。この文章に続けて、『新小説』の趣旨について、次のように述べている。

本報の宗旨は専ら小説家のことばを借りて、国民に政治思想を呼び醒まし、その愛国精神を励ますことにある。一切の淫猥鄙野のことば、徳育に害あるものは必ず斥ける。

「国民に政治思想を呼び醒まし」、「愛国精神を励ますこと」、このように梁は、小説の役割をはっきりと政治思想教育のイデオロギー媒体として打ち出したのである。小説はまた徳育にも良いものでなければならない。中国小説を文学にまで高めることを論じようとしたにも拘わらず、政治的啓蒙に利用するという初期の意図はそのまま継承されている。しかしそこには新しい文学的展開も存在する。それはこの雑誌に小説に関する論説をも掲載しようとしたことである。広告の次の部分を引いてみよう。

本報の論説は、小説の範囲だけに限定し、中国の説部に一つの新しい領域を創ることを目指している。たとえば、文学における小説の地位を論じ、社会における小説の勢力を論じ、東西各国における小説学の進化史及び小説家の功德、中国小説界革命の必要及びその方法などを論ずる。

ここでは新しい西洋的な小説概念を意味するために「小説」という言葉が用いられ、対照的に古いもの、従来のものには「説部」が用いられている。「文学における小説」や「社会における小説」と言うように、小説に新たな位置づけを認めることもこの雑誌の目指すところである。また「中国の説部」から説き起こし「中国小説」の革命に言及しているように、梁啓超ら『新小説』社同人の文学的意気込みは、「中国」に焦点を当てることによって、西洋各国や日本と区別するための民族意識を表明しようとしているようにも見える。梁は自身の小説『新中国未来記』に大きな期待を寄せており、その「緒言」で、この作品を発表するために『新小説』を発刊したと述べたほどだった。『新民叢報』でも小説の掲載をしていたのだからそれを利用することもできたはずだが、わざわざ小説用の雑誌を創刊したことからも、梁啓超らの『新小説』に対する思い入れが窺える。

また、掲載する作品について、「本報に掲載する各篇は、著と訳それぞれ半分ずつにするが、すべては苦心の作であり、務めて中国文学の名誉を損なわないよう求めた」と広告している。ここにきて梁の視野には、政治小説だけに留まらない「中国文学」全体が浮上してきた。前に触れた広告文には、『新小説』に掲載予定の小説ジャンルを「歴史小説」、「政治小説」、「哲理科学小説」、「軍事小説」、「冒険小説」、「探偵小説」、「写情小説」、「語怪小説」、「割記体小説」、「伝奇体小説」、「世界名人逸事」、「新楽府」、「粵曲及び広東劇」と紹

介している。このジャンル区分は梁が西洋から学んだものである¹⁵⁾。西洋近代小説の体系をもって中国小説を論じ、発展させていくという梁啓超らの意図がここにはっきり読み取れる。『佳人之奇遇』、『経国美談』に続いて、『新民叢報』の第2号から、ヴェルヌの『二年間の休暇』を森田思軒の日本語訳から重訳し『十五小豪傑』¹⁶⁾として連載したこともこの西洋受容の表れの一つだと思われる。

とはいっても、梁の関心の中心は政治宣伝に転用しやすい政治小説にある。彼にとってはやはりすべての「文」が政治とかかわらざるを得ない。彼は『新小説』の創刊号から自作小説『新中国未来記』を連載し始めるが、その内容の検討は次の節に譲るとして、ここではまず序文「論小説與群治之關係」について考察してみたい。

「論小説與群治之關係」は今日、梁啓超の最も重要な小説論とされており、中国近代文学の成立に最も大きな影響を与えた文章である。「群治」ということばが、すでにこの文章の趣旨を明らかにしているように、小説の創作者は治国を自らの責任とする士大夫と想定されている。梁はここで「一国の民を新しくしたいなら、まずその国の小説を新しくしないわけにはいかない。ゆえに道徳を……宗教を……政治を……風俗を……学芸を……人格を……」というあの有名な一節から語り始め、『新民説』と連動する形で、新民の形成において小説の果たすべき役割を強調している。また彼はこの序文で、当時の社会における各種の不良思想はみな旧来の小説から来していると断定し、「今日群治を改良しようと欲するならば、必ず小説界革命より始めなければならない。民を新たにしようと欲するならば、必ず小説を新たにすることより始めなければならない」と、小説界革命を初めて提唱した。しかし、その出発点は小説を文学として発展させることではなく、あくまで政治により有用なものとするための「革命」なのである。

人々が小説を好む理由はその分かりやすい言葉にあるだけではない。とりわけ読書人が小説を好んで読む理由として、「小説は人道を支配するための4種の力を持っている」と、梁は述べている。そしてそれらを仏教用語の「薰」(薰染)、「浸」(浸潤)、「刺」(刺激)、「提」(同化)と纏めて、小説の人に及ぼす力を最大限に強調する。最後に「小説は文学の中で最も優れたものである」と小説を文学の最高位に位置づける。

梁は政治の担い手である士大夫に向かって小説を改良することにより「群治を改良し」、「民を新たにす」と説いている。この時期の読者の想定もやはり民衆ではなく、読書人であり、このことは梁の周りの人々にも常識となっていた。たとえば、『小説叢話』における狄葆賢の次の話からも窺うことができる。

15) まず、中国古典小説にはこのようなジャンル区分が存在していない。そして、これまで日本や西洋の小説を紹介する際(たとえば、康有為の『日本書目志』)もジャンル別で記入せず、一纏まりにしている。

16) 1902年2月から8月まで、『新民叢報』第2-4, 6, 8, 10-13号連載。全書は18回あるが、梁啓超は前の9回を翻訳し、羅孝高は後の9回を訳している。『専集』94, p.46。

今日の士大夫のうち、学術分野が広がったことのメリットを受けられる人は10分の1に過ぎず、小説を読ませなくてもその他のところに目を使うのだから、もし良い小説を創り彼らの要望に答えることができれば、これは翻訳や雑誌を創るより効果的なのである。それに、良い小説は、婦女ないし粗野な人が喜んで読むものとは限らないのである。

『新小説』の発刊と梁の呼びかけを受け、「小説をもって人々を教育しよう」（『月月小説』第1巻第1期，吳沃堯，1906，前掲陳・夏書，p.188）として，中国では小説誌が続々創刊されるとともに，数多くの小説が刊行されるようになった¹⁷⁾。しかし，梁の狙いはこれで達成したのだろうか。また彼自身はどのように実践したのだろうか。

V 政治と文化の相関—『新中国未来記』を通して

小説を政治宣伝に用いようとする梁の意図は中国の政治文化の伝統を継承しながら，近代ジャーナリズムの戦略性を強く意識していた。しかしこの節ではもっと一般的な意味での中国文化について考えてみたい。一国の文化とその国の政治の在り方の密接な関係を認識していた梁にとって，政治と文化は彼の思想の二大構成要素だった。1902年頃から，梁は政治において革命と改良の間を徘徊し，文化においては，中国の伝統をどう考えるべきかを思索し始めたのである。そしてこれらの問題について集約的に記述したのが彼の唯一の政治小説『新中国未来記』であった。

この小説は中国最初の政治小説となり，中国近代小説の幕を開くこととなる。前書きの「余この書を著さんと欲して，茲に五年なり」から，梁の実作への意気込みが感じられる。最初の小説論から5年経つが，その間日本の政治小説との出会いからヒントを得て，頭の中で思い続けてきた新中国のあるべき姿の輪郭が次第に明確になり，ついに未来記の形でその理想像を人々に提示することになった。また彼は続けて「この類の書は中国の前途に対し，大きく役立つことを確信しており，これを書こうとする思いは長く衰えることがない」，「この篇では，もっぱら自分の政治意見を発表して，愛国達識の君子の叱正を請いたい」と述べている。すなわちこの小説は政治的实践のために執筆されたのである。

小説が連載される前に『新民叢報』に出された広告（「中国唯一之文学報<新小説>」，『新民叢報』14号，前掲陳・夏書，p.61）には，その構想の粗筋が載っている。最終目的

17) 例えば、『繡像小説』，『月月小説』，『小説林』などが挙げられる。『月月小説』の序にはこのような記述がみられる。「私は飲氷子の『小説與群治之關係』の説に感心した。そこでは小説を改良することが提唱され，数年もたたないうちに，わが国に新しく著され訳された小説の数は汗牛のほどになっている。なおも毎日のように出ていて止むことがないようである」（『月月小説』，第1巻第1期，吳沃堯，1906，前掲陳・夏書，p.187）。

は民主国家を建設することであるが、それを達成するには地方自治から全国統一、辺境問題、ロシアの脅威からの脱出、黄・白人種の戦争を経なければならぬ。中国の危機を打開するために、当時梁が抱えていたさまざまな問題が扱われることになっていた。したがって、全国統一までの内容が全体の4分の1しかないことは注目に値する。この計画通りに完成したとすればかなりの長編になったはずだが、実際のところ、小説は全5回からなる未完にとどまり¹⁸⁾、第1段階として構想した地方自治の部分、つまり、地方一省が独立して「共和立憲政府」を設立する段階にさえも至っていない。期待を膨らませて書き始めた政治小説であるが、早々に中断した原因は様々に推測されている。しかし、多忙な政治活動によって執筆時間が取れなくなったという説は疑わしい。この小説はある意味で梁の今後の政治活動に対する展望でもあったが、小説を書き進めていた1903年頃は日露戦争が勃発する寸前であり、現実政治の方が小説の展開よりはるかに急速に展開し、結局構想通りには書けなくなったというのがもっと事実に近いだろう。

とはいえ、この小説は梁の当時の政治思想をよく表している。小説の第1回では、60年後の未来に立ち、維新が成功し、新しい国家が建設された中国が描かれている。第2回は、そこに辿り着くまでのプロセスを回想する形で小説が展開されるが、回想者である老博士・孔覚民はこの間の歴史を六段階に分けている。そしてその第3回で、当面の問題の解決策として、武力革命をするか、平和的改良をするかについて、主人公の2人に40数回にわたる議論をさせている。フランスやアメリカの革命を理想とする李去病と、立憲君主制を目指す黄克強の意見が真っ向から対立し、容易に一致点を見出せない。しかし、最後に梁が李の口を借りて「流血なくして文明を手に入れることはできない」と言い、黄にも「事をなす時がきたら、臨機応変にやるしかない」と言わせている。このような内容設定は、梁が当時、革命と改良の間で揺れていた状況をよく表していると同時に、現実主義的な梁が改良主義に傾きながら、まだ革命を諦め切っていない中途半端な立場の表明とも見られる¹⁹⁾。1899年に「孫康合作」が計画された（『新中国未来記』をめぐって、山田敬三、1999、前掲狭間編書、pp.332-333）際、梁は一時革命主義に傾いたが、のちに唐才常による「勤王」蜂起の失敗経験や西洋近代思想の大量吸収により、考えが次第に温和になり、1903年アメリカから戻ると一層現実重視となった。アメリカ行きの直前に書かれたこの論争の部分はまさに当時の梁の思想的揺れを鮮明に記録していると思われる。

『新小説』政治小説欄には、『新中国未来記』を補足する形で、『旧中国未来記』と『新桃源』（また『海外新中国』とも名づけられる）の粗筋も紹介し、連載の計画を公表していた。この三つの小説を一つの全体として見ると、梁が『新中国未来記』において展開し

18) ここではその内容が梁啓超の政治理念の方向と緊密に関わる第1, 2, 3回を考察の対象とする。

19) この理解をめぐって、李去病を革命派として理解するか改良派の中の急進分子として理解するかにより、先行研究では意見が分かれている。

ようとした構想は、まず独立国家を創設し、そこに中外民族平等、中・西文化関係などの問題を含ませようとするものである。革命か改良かの選択は全体構想の中ではただの枝葉にすぎない。また、梁はここに一種の文化的ユートピアを描いている。小説の舞台である60年後の中国では維新50年の祝典が行われており、上海では博覧会が催されている。この博覧会の様子を、彼は次のように想像している。

この博覧会は普通のと違って、単に商業や工業の品物を陳列するのみでなく、さまざまな学問、宗教、みなこれを機会に連合大会を開くのである。各国の著名な専門家、大博士の来集する者、数千人を下らず、各国の大学学生の来集する者、数万人を下らず、至るところは演壇があり、日々講演会が開かれる。(第1回、『専集』89, p. 3)

ここには中国文化が世界の主流文化となり、外国の学者と留学生が中国に集まってくるという文化的隆盛の有様が描かれている。1902年時点の梁にとって、この「博覧会」は実際に彼が想像していた文化的ユートピアであり、そこに彼の民族政治、文化復興に対する夢が託されている。中国は将来、政治的中心となるだけでなく、文化的中心ともなるのである。これは現実の中国文化が危機的状況に直面していることを示唆していると同時に、梁が中国文化の未来に対してかなり自信を持っていた証のようにも思われる。

小説では「孔子降誕2513年」と康有為の提唱した孔子紀元が使用されている。回想者役は孔子の後裔であり、「現在は全国教育会会長の任にある」孔覚民という老博士に設定されている。そしてこの老博士の知的履歴は次のように記されている。

この孔老先生は名は弘道、字は覚民、山東省曲阜の人、つまり孔子さまの一族の子孫で……今年すでに76歳、若い時から自分で費用を用意して日本、アメリカ、イギリス、フランスなどの諸国へ留学し、維新時代に民間の志士たちと国事に奔走し、獄に下ること2、3回、新政府が成立すると国憲局の起草委員に任じられ、学部（文部省）の次官に転じ、のち病気で退職してからは民間の教育事業に尽力し、それで教育会長に選挙されたのであった。(同上)

この履歴は小説の主人公の学問習得のプロセスとほぼ同様に設定されている。「孔子」が中国の伝統文化を意味しているとすれば、主人公黄と李の2人が中国学の基礎として学ぶ「陸王理学」、「中国史学」、康有為の『長興学記』、譚嗣同の『仁学』はその具体的内容を指していると思われる。これらに20歳まで専念してから、今度はイギリスを軸にして、ドイツ、フランスの西洋学を学ぶ。登場人物が身につけるべきこのような知識体系の設定は、客観的な時代及び世界認識と、中国思想・理論の土台に立った当時梁の救国の実践的な探究であったと思われる。梁の西欧文化への対応の仕方は、石田雄が近代日本の政治

文化を論じる際に挙げた二つの型、福沢諭吉と中村敬宇²⁰⁾の中間に位置するように思われる。彼は中国の文化的伝統と西欧文化の違いに注目して西欧文化を吸収すべきだと主張するが、同時に中国の文化的伝統のなかにある普遍主義的要素にも注目し、それを発掘しようともしているからである。しかし、この段階の梁は伝統的学問をどのように取捨選択し、西欧文化をどの程度まで吸収すればよいのかという具体案を示していない。

この頃、梁やその周囲の人々は、盛んに中・西文化の比較を行っていた。『桃花扇』の評価を発端として、「小説叢話」の中心的テーマは中国伝統小説の再評価であった。梁はそれまでの小説論において、中国社会の腐敗は旧小説のせいなのだ、と厳しく批判していた。しかし、「小説叢話」においては、たとえば、『紅樓夢』、『水滸伝』、『三国演義』、『西廂記』などを西洋小説と比較して、創作特徴、内容、作者などの面から再評価し、むしろ旧小説に積極的な価値を見出そうとしている。つまり彼は中国小説と西洋小説を同じ土俵にのせて、前者を後者に劣らぬものと評価し始めたのである。

小説の言葉の解りやすさに目をつけ、小説を政治宣伝に用いることを提唱するようになった梁は、それを政治活動に応用するうちに、小説の内容にも注目するようになった。梁の出発点は中国伝統文化に内在する政治文化的立場であるが、この伝統文化一般を見直すに当たっては、小説はまた梁の文化理想を表現する媒体となり、中国文化の特長をなす一要素としてそれを再評価するという展開を見せた。したがって、彼は小説に用いる言葉や文体についてまったく意識せずにいたわけではない。その実態について、次節で考察してみたい。

VI 言葉と文体意識

梁が『清議報』に連載した『佳人之奇遇』と『経国美談』の翻訳文体は、原作の文体に大きく影響されている。柴四郎『佳人之奇遇』の文体は、漢詩文からの語彙が多く用いられ、言葉の順序さえ入れ替えれば、そのまま漢文に復し得る構文である。この小説の眼目は亡国の憤懣や国家の経略を語ることにあり、読書人の好むテーマが読書人にふさわしい文体で、つまり四六の駢儷文で、漢籍に由来する典故を数多く用いながら記述されている。これは華訳が駢文調の文体を採用することを促している（『漢文脈の近代 清末＝明治の文学圏』、斎藤希史、2005、pp. 128-129）。したがって、訳文もほぼ逐字訳が可能なのである。

他方『経国美談』は「章回演義小説の系譜」、「稗史小説体」を踏襲し、場面に応じていくつかの文体を混ぜて使っているのに対し、華訳は完全な章回小説の形式を用い、訳文にも白話で、『佳人之奇遇』とは対照的な姿を呈している。そして、原文の文体からの影響

20) 石田雄（1983）『近代日本の政治文化と言語表象』（東京大学出版会）を参照。

が大きいとは言え、『経国美談』のもつ近代小説的な要素、たとえば、具体的な年月や日時の提示や、ずばりと本題に入るなどの技法は受け入れていない。

このように『清議報』段階では、梁は政治小説の内容の方に関心をもち、文体に関する自覚は少なかったように見える。ところが1902年頃になると、ことばの問題に再び注目するようになる。『新小説』の趣旨に、次のような条がある。

本報は文言と俗語を互いに用いる。俗語の中では、官話と粵語を互いに用いる。しかしある文章がある文体で書かれていれば、その中では混用しない（「中国唯一之文学報<新小説>」，前掲陳・夏書，p.59）。

当時の中国では、話し言葉（俗語）の共通語は公の場で用いるべき口語としての官話であったが、各地にはそれぞれの方言、例えば上海語、福建語、広東語（粵語）などがあった。官話と文言は、公的な話し言葉に対する書き言葉の関係にあると単純化すると少々精確さに欠けるが、広東語（粵語）と官話ひいては文言とは全く異なる言語なのである。科挙試験を受ける読書人が官話を話せなければ官僚同士ひいては皇帝との意志疎通も欠き、各地へ赴任しての実務にも支障を来すはずだが、実際方言しか話せない人も少なくなかった。たとえば梁啓超はその一人である。このような状況下で、漢文で作文の訓練を受けてきた読書人がいざ俗語で文章を書こうとすれば、方言ではできても官話では皆ができるというわけにはいかない。

全国向けの雑誌で俗語を用いると言えば官話を意味するはずだが、併せて広東語をも使うというのは、『新小説』社在籍スタッフの言語状況に応じた方便だった。『新小説』の発刊と同日に出た『新民叢報』第20号に「<新小説>第1号」という文章が載っているが、そこに次のような断り書きがある。「文言、俗語の両方を用いることは、その短所であるが、中国各省の言葉が一致せず、著者もまたみな同じ省の出身ではないのだから、これは仕方のないことである」（前掲陳・夏書，p.57）と。

とはいえ、読者をすでに読書人と設定している以上、なぜここで再び俗語に脚光を浴びさせようとしたのだろうか。

『新小説』第7号（1903）に掲載された狄葆賢の「論文学上小説之地位」には、次のような記述がある。

飲冰室主人（梁啓超）がいつも私に言うには、俗語文体の流行こそ文学の進歩の最大の要点、各国みなそうであり、中国もそうであるべきだ、と。近頃欧米各国の学校ではギリシャ・ローマの文章を廃そうとの議がますます盛ん、日本においては、最近の著述はまた言文一致体をもって最大の目標となす。

ここでは俗語の使用が「文明」の趨勢、「進歩」的、つまり近代的なこととして称賛されている。梁が俗語を提唱する背景に日本の言文一致運動があったと斉藤は指摘しているが²¹⁾、梁はまた次のように書いている。

文学の進化には、大きなかなめがある。すなわち古語の文学から俗語の文学へと変化するということだ。各国の文学史の発展は、すべてこの道筋をたどる。中国先秦の文は、ほとんど皆俗語を用いた。『公羊伝』、『楚辞』、『莊子』を読むと、各国の方言が混じり出ていることが少なくないのは、その証左である。だから先秦文章界の光輝くこと、数千年にわたって最高とされるのだ（「小説叢話」、『新小説』第7号、1903）。

先秦を例に出して推賞することは、進化論の立場から論を進めるには強引で矛盾している。しかし、梁が先秦に言及する真意はむしろ、俗語で書くことが文化の繁栄を齎すという点にある。つまり、文学の質の進化は文言から俗語への変化と一致し、俗語で書く時代は、文学が最も繁栄し、質の高い時代であると彼は考える。続いて梁は俗語を基軸として文学史を再構築しようと試み、俗語文学の歴史上における発展の流れを次のように分析している。

一般には、宋・元以降は中国文学の退化の時代だと言われることが多いが、私はそうは思わない。六朝の文章は退廃的と言うに及ばず、唐代の韓愈・柳宗元ら諸賢も、自ら八代の衰えを興したとは言うものの、その文章の文学史上における価値となると、どれほどだろう。韓愈は三代・兩漢の書でなければ読まないと言ったが、私の考えではこれが弊害のおおもとなのだ。宋以降は、実は祖国文学の大進化だ。なぜか。俗語文学が大発達したからだ（同上）。

俗語文学の発達は大進化の印であると梁は説いている。彼は文学現象を他の社会現象と同様に進化論で一元的に説明しようとする²²⁾。しかし、特定の歴史段階に特定の芸術様式が生まれるとすれば、そう簡単にはいかない。この時期、政治上は革命思想を持ち、文学上も革新を主張した文学趣味の高い作家たちの多くが創作に文言を用いたのに対し、それほど真面目ではなく、営利目的で創作した作家たちはかえって白話で書いていた。そもそも

21) 品川弥二郎が物集高見の『言文一致』（1886年）に寄せた序にこのような言葉がある。「文学の、進歩を徴するには、種々、あるべしといへども、我が国に於ては、先づ、言文の、一途に帰するを以て、其第一徴と、称すべし」。梁と品川の交流を考えるならば、日本の言文一致運動について、梁は一定知識をもっていただろうと斉藤は指摘している。前注斎藤論文を参照。

22) 梁の進化論に関する考え方は、彼の他方面の思想とも深く関連しているので、今後稿を改めて詳しく論じるつもりである。

当時の中国では白話小説と文言小説は異なる種類の文章として認識され、それぞれの表現領域、それぞれの作者群、読者群を持ち、互いに干渉もせず高下を論じられることもなかった。小説界革命以来、白話小説と文言小説の区別は文章種類の差異から文体の差異と意識されるようになった。同じ小説雑誌に白話小説も文言小説も掲載される。西洋小説の翻訳も、白話訳、文言訳の二つの場合がある。さらに、一人の作家が時には白話で創作し、時には文言で創作する。このような現象が起きたのは、小説が単なる民衆向けの教育手段と考えられるだけでなく、芸術的価値を持つ文学の一ジャンルとして確立されつつあったためである。その結果、白話小説が大きく提唱されると同時に、文言小説も昔以上の繁栄を見せたのである²³⁾。

梁の意識は近代を目指していたが、「語言（話し言葉）と文字（書き言葉）とは隔たることといよいよ遠く、今それを為そうとしても、まったく困難なことは、自らの体験からもよく承知している」（『小説叢話』、『新小説』第7号、1903）と語っているように、実際の創作となると困難は大きかった。そこで、梁はついに妥協せざるを得なかったが、その妥協は『十五小豪傑』を翻訳した時の後書きに見てとれる。

この書では元来『水滸伝』や『紅樓夢』の体裁に倣い、すべて俗語を用いようと考えたのだが、翻訳の段になると、たいへん困難に感じた。文言を混じえることで、労を減らし功をかせぐことができたのである。……ただ語言と文字の分離が、中国文学の最も不便なところであり、文界革命がそう簡単には行かないことが、これによっても分かる（『新民叢報』第6号、1902年4月）。

梁は『新中国未来記』の文体について、「緒言」で「説部に似て説部に非ず、稗史に似て稗史に非ず、論著に似て論著に非ず、何種の文体に成るを知らず」と吐露している。また、「新小説の意境と旧小説の体裁は、往々にして相容れない」（『新小説』第1号、前掲陳・夏書、p. 57）とも述べている²⁴⁾。彼は文体の革新を自覚してはいたが、結局深く追求するには至らず、内容の革新をより重要視した。

したがって白話は、当時の新漢語による近代的知識や思想の伝達には不利であり、読書人の表現媒体となるのは困難であった。実際にも、当時は文語小説のほうの売れ行きがよかったという。林琴南の古文体翻案小説が大いに人気を博したことはその典型的な例であったと言える。

23) 阿英『晚清小説史』（北京作家出版社、1955）、前掲陳・夏書を参照。

24) 梁が新小説の意境と旧小説の体裁に対する認識や試みについて、夏曉虹は『覚世與伝世—梁啓超的文学道路』（2006、中華書局）において詳しい考察がなされている。

VII まとめ

梁啓超は政治宣伝に役立てるために、それまで低い地位にあった小説に注目し、典型的な効用主義的文学論あるいは中国政治文化の基本精神からスタートした。亡命後、日本の政治小説との出会いを契機に、小説に関する知識を系統的に吸収するうちに、彼は西洋における小説の位置づけ、作者、内容、創作特徴、文体、言葉などが中国の説部と異なっていることを少しずつ自覚するようになった。元来、梁の主要な関心事は政治であったから、救国の方策を求めるために日本に亡命して以来最初の5年間は西洋近代思想の吸収に明け暮れた。このような蓄積を自己の思想的土壌に接合させ始めた頃、彼は中国の伝統学問を全面的に見直す姿勢をも示した。

この流れのなかで、梁は小説界革命を提唱し、中国最初の小説専門誌を創刊して自らも創作を試みることになったのである。その結果、彼は小説に二つの役割を期待するようになった。一つは引き続き政治的実践のための宣伝の役割、もう一つは西洋文化に対抗できるための近代中国文学の構築という役割である。したがって、小説への新たな期待は、梁の夢みる中国像、つまり富強な国力だけでなく、文化の繁栄をも併せもつ国という構想と深く関わっていた。そこで、梁は新しく受容した進化論や日本の言文一致運動から学んだ知識を駆使し、主に俗語をベースとする中国文学史の再構築を試みた。しかし、近代小説の特徴を自覚した梁の創作実践は成功したとは言えない結果に終わった。

また、梁は一般民衆の啓蒙を目指して小説論を始めたが、政治小説で扱うべき内容や当時中国民衆の知的レベルが非常に低いという現実認識（この認識は後に梁が『民報』と論争する時に提起した開明専制論につながるのである）から、彼は小説の宣伝対象を読書人に置くようになった。このことが梁に小説の文体、言語表現についての妥協を齎した一要因であったと考えられる。

梁が提唱した小説界革命は中国文学史に近代文学の礎石を築いたと言われる。彼は文学のための文学を指向したわけではなかったが、梁の近代文学への寄与は、上述したように、まったくその意図と無関係（「科学救国の夢」上、山田敬三、2006）であったわけではない。政治意識から出発し、途中から文学意識も芽生えてきたが、この文学意識は西洋には中国と異なる独自の文化があることを意識するようになって初めて生まれたものだった²⁵⁾。さらにその結果として、梁は中国の古典文化を再評価するようになるのである²⁶⁾。本稿で扱った『新小説』の段階では、梁はジャーナリズム活動を通して、小説を政治的に活用しようとしたと同時に、中国文化の一特長をなす古典小説を再評価し、さらに日本や西洋小説を

25) 梁の西欧文化対応について、また別稿で詳しく論じるつもりである。

26) たとえば墨子(1904)、明朝学者の学説(1905)、王安石(1908)、管子(1909)などを論じるようになった。

模範に、理論と実践の両面から中国小説を近代的なものに発展させようと努力したといえるだろう。

(おう じゅんばい・名古屋大学大学院 博士後期課程)

【参考文献】

- 阿英 (1955), 『晚清小説史』北京作家出版社
- 石田雄 (1983), 『近代日本の政治文化と言語表象』東京大学出版会
- 大石裕 (2005), 『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房
- 郭沫若 (1951), 『少年時代』上海新文芸出版社
- 康有為『日本書目志』, 『康有為全集』3
- 斎藤希史 (2005), 『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』名古屋大学出版会
- 島田虔次訳 (1971), 「新中国未来記」, 『清末民国初政治評論集』平凡社
- 陳平原, 夏曉虹編 (1997), 『二十世紀中国小説理論資料』第1巻, 北京大学出版社
- 丁文江, 趙豊田編, 島田虔次編訳 (2004), 『梁啓超年譜長編』岩波書店
- 松井幸子 (1979), 『政治小説の論』桜楓社
- 夏曉虹 (2006), 『覚世與伝世 — 梁啓超の文学道路』中華書局
- 夏曉虹 (2006), 『閲読梁啓超』生活・読書・新知三聯書店
- 狭間直樹編 (1999), 『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房
- 柳田泉 (1935), 『政治小説研究』上, 東京春秋社
- 柳田泉編 (1967), 『明治政治小説集』2, 筑摩書房
- 山田敬三 (2006), 「科学救国の夢」上, 福岡大学人文論叢 33 (1)
- 矢野竜溪 (ほか) 著, 伊藤整 (ほか) 編 (1965), 『政治小説集』講談社
- 梁啓超 (1934), 『飲冰室合集』, 『飲冰室專集』中華書局